

クマのプーさんの光と影

2019年6月

眞鍋由比

プーさんといえば昨年公開のディズニー映画『大人になったプーと僕』もユアン・マクレガーがクリストファー・ロビンが大人になってサラリーマンでリストラ寸前のつらい毎日のなか、懐かしいプーさんに再会して「なにもしない」喜びを思い出し、家族のみんなも会社の危機まで救うというディズニーらしいハッピーエンドのお話になっていました。プーさんといえば子どものころの幸せな記憶というイメージが強いと思います。

現在あべのハルカスで6月30日まで「クマのプーさん展」が開催され、ロンドンにあるVictoria & Albert博物館所蔵の繊細なE・H・シェパードの原画が見られます。ミルンのセンスを持った言葉選びでプーさんの世界はいきいきと構成されていますが、あの絵がなければここまでの影響力はなかったでしょう。なにともし愛らしいプーの仲間たち。動きや感情を示すために描き足したり、直したり。鉛筆を消した跡まで見られるんです！穴につまんで動けないプーを引っ張り出すようにしている動物たちが実はひっぱるフリだけでまったくひっぱりに関係ない動物がいたり細かい演出も楽しい。何度もシェパードと密に連絡をとって、彼が打ち合わせより大きな絵を持ってきたときは、それにあわせてミルンが文を書き足してページを増やしたりするような、すばらしい連携が行われて作り上げられた作品シリーズだったと感じられます。

アン・スウェイト著『グッバイ・クリストファー・ロビン クマのプーさんの知られざる真実』国書刊行会(2018)では、ミルンが息子を可愛がり観察していた様子がわかります。けれど、この本の写真の息子は本当に『クマのプーさん』の挿絵そっくりで、どこにいても登場人物と同一視され、このままでは一人の人間としてのプライバシーが危ないと、寄宿学校に入れられました。でもそこでもずっと「クリストファー・ロビン」としていじめられ、地獄だったと本人は回想します。だから父が軍隊にいかないよう手配しても、「普通の人間として」入隊したいと親の気持ちを裏切り、戦地に向かってしまうのでした。

後年、本屋をひらいた息子はプーさんの4作品（物語集『クマのプーさん』『プー横丁にたった家』、童謡集『ぼくたちがとてもちいさかったころ』『ぼくたちは六歳』）の莫大な印税の受取を拒否したと映画の最後に語られます。プーさんの巨大な成功とうらはらの自身の能力は全く評価されない苦痛。クリストファーは長い間父とその作品を恨んでいたようです。

ミルン自身も、脚本家として詩ひとつで500万稼ぐくらいの才あふれた作家でしたが、それでも「プーさん」の作者として以外は推理小説「赤い館の秘密」くらいであまり評価されないという苦痛を味わいました。

「戦争を終わらせるための戦争」と信じて第一次世界大戦に参加したミルンはその愚かしさに気づき、戦争反対の作品を1934年には「名誉ある平和」という本を出版し、「戦争とは、人間の悪意と愚かさを最大限に表現するものだ」と必死に平和主義を訴えます。それが自作で一番重要だと思っていたと展示にありました。戦争だけは断固拒否すべきであると、伝わってくる展覧会でした。プーさんの作品が発表されたのも戦後、荒んだ社会で自分の、あるいは子どもの温かい世界を愛し取り戻したい人たちが待ち焦がれていた世界、だからこそプーさんはあそこまでベストセラーになったんだと、戦争の影が「プーさん」を輝かせたのだと。

この貴重な作品群は、今回の公開のあと、10年間非公開になるそうです。世界を巡回して人気を博す作品群なので、今回日本で見られるのがおそらく一生に一度の経験になる可能性が高い。今月あべのハルカスまでいってみませんか？